

飛驒を恋い慕う

呉 銘 蟾*

日本の“天文月報”、“天文と気象”などの雑誌から、京都大学飛驒天文台がドームレス太陽望遠鏡を建設していることを知っていました。太陽研究者として、その詳しい情況を知りたいと思っていました。幸い、1979年10月、中国科学院天文視察団の一員として日本を訪問する機会を得ました。その時、飛驒天文台へも立ち寄りました。私の関心のまとであるドームレスの側にやっと立つことが出来ました。しかし、残念なことにその日の天気は霧でした。ドームレスは濃い霧に包まれていました。流れる霧の晴れ間から、一瞬、ドームレスの姿を望むことが出来ました。しかし、その一年後に、再び飛驒天文台を訪れることになりました。今度は単なる見学ではなく、ドームレスを使っての太陽の観測に参りました。こんなことは夢にも思わなかったことでした。

私は南京天文台天文機械工場の李さんと一緒に、1980年9月、飛驒へ来ることが出来ました。これは中国科学院と日本学術振興会との間の人員交流協定のおかげであります。東京での「恒星としての活動太陽」日仏セミナーと、水沢での日本天文学会秋季年会へ出席して、10月下旬、私たちが飛驒天文台へ帰ったとき、取材に来られた京都の毎日新聞社の記者森さんは私たちに尋ねられました。「滞在先としてどうして京大飛驒天文台を選ばれましたか。」私たちは次のように答えました。

雲南天文台は中国の最も新しい天文台です。天文機械能力といい、研究水準といい、まだ十分高くはないですけども、雲南天文台は天気が良く天文観測に適しています。たとえば、太陽観測は、多年の経験から1年に320日くらい行うことが出来るといえます。目下、小さい口径の太陽望遠鏡を使って、太陽黒点観測、フレアの監視、太陽黒点磁場の測定、太陽活動の予報などを行っています。太陽活動域の物理観測もしていますが、低分解(3"-5")の太陽写真しか得られません。より深く太陽の物理研究をするためには、高分解能(0"1-1")の太陽望遠鏡がなければなりません。中国では、高分解能といってよい太陽望遠鏡が二つだけ開発されています。一つは北京天文台に属する太陽磁場望遠鏡(口径35cm、屈折式)です。もう一つは雲南天文台に属する光球彩層太陽望遠鏡(口径26cm、屈折式)です。これらを使って、太陽活動域現象の微細構造の研究をする予定です。だから

ら、雲南天文台の太陽研究者だけでなく、全中国の太陽物理学者が優れた太陽塔望遠鏡及び付属設備の新設を熱望しています。どのようなものが最も適しているのか、中国では少ししか経験を持っていません。それで、この仕事を行うには、初めに世界で有名な太陽塔望遠鏡を十分調べる必要があります。その後で、実施できる一番良い提案を作り出します。飛驒天文台のドームレス太陽望遠鏡は、世界の有名な太陽塔望遠鏡の優れたものを吸収するとともに、自身の特長をもっています。だから、飛驒のドームレスを第一の目標に選びました。

1980年9月、私たちは日本に到着しました。京大教授川口市郎飛驒天文台長の御厚意によって、飛驒のドームレスで船越様と黒河様と一緒に45日間を過ごすことが出来ました。お二人はドームレスの構造を詳しく説明して下さい、観測作業を教えてくださいました。特に船越様は、現代太陽光学機械の設計原理、ドームレスの光学・機械・電気・コンピュータ制御、観測作業、太陽物理研究を十分に身につけられていると思えました。ドームレスに関するいろいろな質問にも、他の学術問題にもみなよく答えることが出来る方でした。使用者側としての私も、設計者側としての李さんも共に大変満足しています。

ドームレスの主な創建者の一人である花山天文台の中井様は、わざわざ京都から飛驒天文台へ来て下さり、私たちとドームレスについて深く討論して下さいました。このような討論から、私たちは沢山の教えを受けました。

このドームレスの開発と建設のために、飛驒天文台の皆さんは一生懸命にたくさん仕事をされました。人里はなれた大雨見山頂上に、このように立派なドームレスを建てられたことは目覚ましいことであり深く感心しています。

飛驒天文台からは北アルプスの連綿な山々や雲峯が望まれます。なんと雄大で綺麗な景色だろう。私は自然の景色がとても好きだから、景色の美しさからいえば、日本の天文台のなかでは、飛驒天文台と岡山天体物理観測所と乗鞍コロナ観測所が非常に好きである。

10月19日、夕日に輝くドームレスと別れる時には、車の中で盛んに手を振り名残を惜しみました。“さようなら飛驒天文台”、“さようならドームレス”、“bye-bye Domeless”といいました。

10月20日、それまで一ヶ月間滞在させて頂いた日本民宿「長七」の唐谷一家とお別れするのは大変名残惜し

* 中国科学院雲南天文台 Wu Ming-chau: How I pine for Hida!

いことでした。「長七」では毎日至れり尽せりのおもてなしで、どのようにお礼申し上げたらよいか分からないほどです。

奥飛騨温泉郷と、小京都とも称される高山を別れてから、京都大学宇宙物理学教室、花山天文台、三鷹の東京天文台、岡山天体物理観測所を訪問しました。まるで飛騨天文台のように親切に迎えて下さり、行き届いたお世話をして下さいるので少しも困りませんでした。

二度も日本を訪問したことは、私にとって一番貴重な

楽しいことでした。日本の天文台と日本の天文学者、日本の山紫水明の景色と日本の皆さんの親切な友情、これらは私の心に美しい印象を残しました。いつまでも忘れることが出来ません。

私の知った日本の友人たち、飛騨の川口、神野、船越、黒河と他の皆さん、民宿「長七」の唐谷一家、京大の小暮、上杉、花山の中井、東京天文台の守山、西、牧田、岡山の清水(実)、あなたがたのお名前を心にちゃんと覚えてあります。いつの日かまたお会い致しましょう。

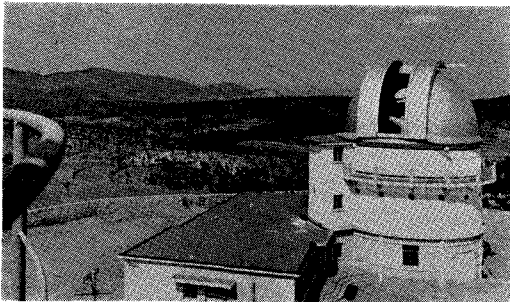
飛騨天文台に呉さん李さんをむかえて

飛騨天文台 川口市郎

昭和54年10月8日、中国科学院天文視察団の一行が飛騨、花山両天文台を訪問した。紫金山天文台副台長趙さんを団長とする一行7名で、中日科学技術交流協会の黒田百合子さんが一行の御世話をされていたようであった。しかし一行の中には、日本人よりも日本語をよくしゃべる劉彩品さんがおられたので、会話には全く不自由はなかった。このとき一応形どおり天文台の案内をしただけで一行は次の訪問先へと急がれたのだが、この時趙さんや劉さんが飛騨天文台はよくもこんな小人数でやってゆけるものだと言っておられたのを記憶している。

翌55年2~3月頃、日本学術振興会の加藤さんから電話があり、中国人学者が2名飛騨に滞在してドームレス太陽望遠鏡について勉強したいといっているので受入れてもらえないかと話があった。全く突然のことでもあり、当時ドームレス望遠鏡は時々故障をおこすおそれもあり、またテスト観測中でもあったのでためらいの気持もあったが、天文台の人達の積極的な意向も考慮して受入れを決心した。ただ4月受入れは梅雨にかかることもあって9月からならんと返事しておいた。

飛騨天文台ではお客様には必ずサインして頂くことにしている。中国人学者呉さん・李さんのサインのコピーを示すが、特に呉さんの達筆が目につき、さすが漢字の



雲南天文台、雲南省昆明市郊外にある

55.9.24

重訪飛騨
川口市郎

55.9.24

李挺一 南京天文儀器厂

我仍非常高兴能在 Hida 天文台学习和工作一段时间，希望我仍的这次访问有助于加强中日两国天文界之间的友谊。

呉さん、李さんの署名(飛騨天文台サイン帳より)

本家である。呉さんはさきへのべた天文視察団に入っておられたのは失念していたが、その悠揚せまらざる中国的大人の風格・李さんの天真爛漫・直情径行の人柄の組合せという中国側の配慮には敬服した。このお二人、飛騨天文台滞在中はドームレスでの観測はもとより文献の複写、さらには観測技術の詳細について、船越・黒河両君にとことんききただし、両君ともいささかあきれ顔であったが、中国天文学を背負う熱情のすさまじさには感服したようである。

ご両人が特に気に入ったのは民宿「長七」の若奥さんの親切であろう。天文台で早朝観測をするときの宿泊を除き、いつもは麓の民宿に下宿し、朝夕の往復は天文台の通勤ジープに便乗することにもしてもらった。この年は9月から11月にかけて屢々連休があり、李さんは自分は日本に観光に来たのではないと、日本の祝日の多さを嘆いておられた。連休にはご両人は「長七」の若奥さんのお伴をして高山見物、または山での栗拾いなど全く家族の一員としてのもてなしを受けた。これははじめての経験として大変面白かったようである。言葉がうまく通